

雨水を集めよう

社会福祉法人愛育福祉会 こぼと保育園（宮崎県延岡市）

[4歳児]

雨水集めをすることになり、子どもたちが自分で保護者に話したり見付けたりして、家から容器を持参する。

<雨天の日> 雨水を溜めるために、園庭に出る。やや強めの雨が降ってはいるが、外に出ることが嬉しくて、大騒ぎしながら外に出る。保育者が「さあ、どこに置いて溜めようかな？自分で探してごらん」と言葉をかけると、「わあっ！」と子どもたちは思い思いの方向に散っていく。



（保育者：容器を置く場所は子どもたち自身が考えて置くように見守る。）

当初は容器を持って移動を続ける子どもが多い。その足が徐々に止まる。

- ・ブランコの下にできた水溜りを見てしゃがみ込む（数名）。
- ・水溜りの水を容器ですくって入れる。「溜める」の意味が理解できずにいる様子が見られると思った保育者が「置いて溜めるんだよ」と声をかける。容器を置く場所を探し始める。
- ・雨どいの滴を容器で受け止める。
- ・雨水を容器に溜めることに夢中になる（増えていく）。
- ・木の葉の滴を直接容器に受け止めようと手を差し伸べる。
- ・上から落ちてくる滴を口の小さなペットボトルで受け止めようと、じっと手を差し出す。
- ・雨に濡れるのもかまわずに、「溜まれ！ここぞ！」と木々を見上げる。
- ・園庭の中央に友達と容器を並べて、みんなと一緒に雨水を溜めようとする。



[A児の姿]

外階段屋根の雨樋を伝って落ちる滴を発見。それを直接容器で受け止めようと手で持ち上げ、傘も差さずにじっと溜め続ける。そのうち、滴の落ちる場所に容器を立てようとするが、倒れる。保育者の「挟んでみたら？」という言葉から、近くの植木を2つ移動させ、容器を挟んで固定し、滴を容器に受け止め始める。



（傘を差して再び園庭に行き、どのくらい溜まっているのか見る）

「先生、こんなに溜まっている！」と喜ぶ

「先生、私のはどうして溜まってないの？」とC児が言う。ペットボトルの口を広くしている子がいるが、改良されていない普通のペットボトルを使っているC児は、容器の口が狭いため水が溜まらないことには未だ気付かない。

A児は植木に挟まれた容器の溜まり具合を確認し、再び容器を持ち上げて直接滴を受け止め始める。保育者が「Aちゃんのはこんなに溜まっているよ」と声をかけると、周りの子どもたちが集まってくる。そして、自分の容器を同じように持ち上げ、A児と同じように滴を受けとめようとし始める。A児の容器には半分ほど雨水が溜まっており、満足そうにそれを眺めた後、再び植木で固定した。



雨水の溜まり具合に差があることに不思議そうな子どもたち。「どうして溜まらんと？」容器の置き場所を再度確かめながら屋内に戻る。

みどころ

子どもたちは「雨水を集めよう」という思いがあるので、容器を置く場所を考えたり選んだりしています。また、「雨の中で遊ぶ」といういつもと違う雰囲気からはしゃぐ姿や、「集めるってどうやるのかな？」と水溜まりの水をすくう姿など、保育者が目指す姿としては想像していなかったであろう「雨や雨水とのかかわり」が引き出されています。こうして、子どもが自ら心を動かし、考えたり行動したりすることで不思議さや疑問を感じるものがきっかけとなり、「科学する心」が育まれる探求心につながる遊びへの展開が期待できます。